

文・編集・発行 / 斉藤新緑 Tel (0776-82-1141) Fax (0776-82-2261)

【斉藤新緑事務所】〒913-0046 福井県坂井郡三国町北本町2-1-20 京福三国ビル2F

【e-mail】sinryoku@aurora.ocn.ne.jp

【ホームページ】http://www4.ocn.ne.jp/~sinryoku (斉藤新緑で検索可)



ほっとらいん

VOL. 51



答 辞

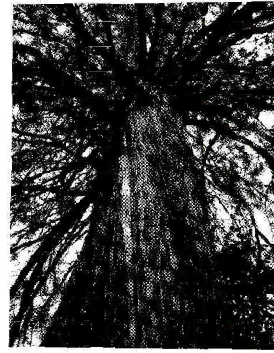
（略）
私たちが中学校で習ったことは、人間の生命というものは、すばらしく大事なものだということでした。そしてそのすばらしく大事な生命も、生きて行く態度をまちがえば、さっぱりねうちのいないものだということならったのです。

（略）
私たちの骨の中しんまでしみこんだ言葉は「いつも力を合わせて行こう」ということでした。「かげでこそこそしないで行こう」ということでした。「働くことが一番すきになるう」ということでした。「なんでも何故？ と考えろ」ということでした。そして、「いつでも、もっといい方法はないか探せ」ということでした。

そういう中から『山びこ学校』というのが本になりました。その本の中には、うれしいことも、かなしいことも、恥しいことも沢山書いてあります。しかし私たちは恥しいことでも、山元村が少しでもよくなるのに役立つならよいという意見でした。

私たちはもっと大きなもの、つまり人間のねうちというものは、「人間のために」という一つの目的のため、もっとわかりやすくいえば、「山元村のため」という一つの目的をもって仕事をしているかどうかによってきまってくるものかどうかを教えられたのです。

「山びこ学校」から学ぶもの



無着先生に教えられた山元中学校第四回生は四十三人。昭和二十六年の卒業式で読まれた「答辞」の文書を読むと、教えることのすばらしさと、学ぶことのすばらしさが身近に伝わってくる。

「物質的には豊かになくても、人の心の素朴さが守られ、親も子も一所懸命生きていた。快樂には縁遠く、禁欲的であることを強いられている生活ではあったが、あの時代の日本人の方がもっと上質であったと思う。

現在の「繁栄」のために支払った代償はとりかえしのつかないほど大きいと考える。」
（澤地久枝／ひたむきに生きる）

▼愛鳥週間では、こんな記事が紹介されていた。
「山が焼けるぞ立たぬか雉子よこれが立たりよか子を置いて。」

巣を営んでいる野を焼かれると、キジは危険もかえりみず、ひな鳥を救うため巣に戻るといふ。子どもに対するそんな思いの深さを表した歌だ。戦後、日本鳥学会の投票でキジが日本の国鳥に選ばれたのも、こうした情愛が理由の一つと

親が子に殺される悲劇も相次いでいる。未遂事件も合わせる。と昨年の検挙数は百二十三件。人間も壊れてきた。

▼昭和二十三年四月、山形師範学校を卒業したばかりの無着成恭という名の新任教師が、赴任した山元中学校のある山元村は、山形市に出るのに、どんなに急いでも丸一日がかりという辺鄙な山村で、子どもたちは、生計を立てるために家事労働が求められ、学校にも満足に行けず、学力といえれば小学生低学年並みで自分の名前を漢字で書けない子どもが五人もいたという状況だった。

自分たちが生れた村はどういう村であり、どういう欠点を持っているのか。それを子どもたち自身に調査させ、記録させることこそ生きた教科書、四十三人の生徒のうそ偽りのない生活記録、クラス文集「きかんしゃ」。それが話題になり、「山びこ学校」という一冊の本になった。

▼小学校で英語やパソコンや、株を教えたりすることより、大事なことがあると思えてならない。「山びこ学校」に学ぶものは多い。

一九五一年三月二十三日
山元中学校第四回卒業生代表
佐藤藤三郎

めしのだしにはならないが、

生きるたしにはなる

おちゃくせいぎょう
無着成恭先生の詩の授業

詩は人間の生き方の根本を教えてくださいます
生きるためには食べなければなりません
食べるということはいのちのあるものからいのちをいただくことです
だから

お米さん お豆さん ごぼうさん 大根さん
牛さん 豚さん いわしさん さんまさん
あなたがたの おいのちをいただいで
生かしてもらいます
そういつて 手を合わせて
ふかぶかと頭をさげることが詩です

詩とは
いのちに手を合わせることです
詩とは
いのちをコトバで書きとめたものです

詩とは
コトバのおそなのです

無着先生。先生からおそわった詩、とっても印象に残っています。なぜだかわかりません。だけど、なにか考えようとしたり、自分で決断しなくちゃいけない事件であろうと、先生からおそわった詩のどれかが、ふつと頭にてくるのです。とっても不思議なんです。あと三か月、もつとつと教えてくださーい！
(本郷治子 年賀状より)

ぼろぼろな駝鳥

高村光太郎

何が面白くて駝鳥を飼うのだ。
動物園の四坪半のぬかるみの中では、
脚が大股すぎるじゃないか。
頸があんまり長すぎるじゃないか。
雪の降る国にこれでは羽がぼろぼろすぎるじゃないか。
腹がへるから堅パンも食うだろうが、
駝鳥の眼は遠くばかり見ているじゃないか。
身も世もないように燃えているじゃないか。
瑠璃色の風が今にも吹いて来るのを待ちかまえているじゃないか。
あの小さな素朴な頭が無辺大の夢で逆いているじゃないか。
これはもう駝鳥じゃないじゃないか。
人間よ、
もうよせ、こんな事は。

「ぼろぼろな駝鳥」を勉強して

……川崎健……七年

無着成恭先生の詩の授業は、週に二時間「詩華集」と名づけたノートに、自分の心にしみた詩やことばを書き集める。

知っている。動物には欲がない。
たとえば、ライオンだって、むやみやたらとしま馬を殺したりはしない。必要以上は殺さない。必要な最小限度だけ殺す。それに対して人間の欲はきりが無い。動物には思いやりがある。心がきれいだ。じゅんすいだ。ぼくはそれを知っている。ぼくが、その動物をほんとに愛して、友だちとしてつ

表札

石垣りん

自分の住むところには
自分で表札を出すにかぎる。
自分の寝泊りする場所に
他人がかけてくれる表札は
いつもろくなことはない。
病院へ入院したら
病室の名札には石垣りん様と
様が付いた。

旅館に泊つても
部屋の外に名前はないが
やがて焼場の鐘にはいると
とじた扉の上
石垣りん殿と札が下がるだろう
そのとき私がこぼれるか？

様も
殿も
付いてはいけない、
もうよせ、こんな事は。》

自分の住む所には
自分の手で表札をかけるに限る。

精神の在り場所も
ハタから表札をかけられてはな
らない
石垣りん
それでよい。

先生。ここまで書いてきて、ぼく、なみだがでてきてしまったぜ。

●表札を勉強して……

福田淳……七年

ぼくは、この詩がすきになった。いい詩だと思う。自分の名前をよくするのも、ダメにするのも、自分の決心ひとつだと思つた。
親や先生から、勉強しろ、勉強しろといわれてするような勉強はダメで、自分で、オレは勉強するぞ！つてきめてやるのでなくて、はだめなんだということ、この詩を勉強してよくわかつた。
もう、中学生だもんな。オレ、やるぜ、先生！

●……竹中里加……七年

わたしははじめ「表札」を読んだら、すぐ、この詩は、自分分でもいいって、そうしないところが、この詩を勉強してよくわかつた。
たとえば、病院で部屋の外にはられるときは、病気をしていたよくないし、お金もたくさんとられる。また、旅館へはいつてもお金をとられるし、もしも、焼き場にはいつて殿とつけられるのは死んでいることで、いやだ。殿とつけられないで、いつてもつけられてしまいういやさを、石垣りんは短い詩にまとめていると思う。

●……窪寺詠子……七年

私にとつて、「表札」の詩は、とつてもむずかしかつた。
今まで、自分の家の表札について考えたことがなかつた。でも、よく考えてみたら、表札がとつてもだいいじに思えてきた。なぜかと言うと、もし、私の名前がしらない人にかつてにつかわれたりしたら、たいへんなことになる。
この詩のなかで、いちばんむずかしいと思つたのは、
《精神の在り場所も／ハタから表札をかけられてはならない》
というところだ。精神の意味がわからないから、これがわかれば、この詩の意味がわかるんじゃないかと思つたので、じしよをひいてみたら、「心」となつていた。
この詩の意味は、人のさしずいこう。

とくに、ちがうことばで後ろで強調し、びしつと決めているのはすごいと思う。自分分だ！というところがしみてと伝わってきたような気がした。それから、今までこんなことを考えたことのないわたしにとつては、とても考えさせられ、気がつかなくつた自分分だ！はずかしく思う。そう、わたしの心にこつた、《様も／殿も／付いてはいけない、／石垣りん／それでよい。》
このことばを深くかみしめていこう。

奈々子に

赤い林檎の頬をして
眠っている 奈々子。

お前のお母さんの頬の赤さは
そっくり
奈々子の頬にいつてしまつて
ひとつのお母さんの
つややかな頬は少し青ざめた
お父さんにも ちよつと
酸っぱい思いがふえた。

唐突だが
奈々子
お父さんは お前に
多くを期待しないだろう。
ひとつが
ほかからの期待にたえようとして
どんなに
自分を駄目にしてしまつたか
お父さんは はつきり
知ってしまったから。

お父さんが
お前にあげたいものは
健康と
自分を愛する心だ。

吉野弘

ひとつが
ひとでなくなるのは
自分を愛することをやめるときだ。

自分を愛することをやめるとき
ひとは
他人を愛することをやめ
世界を見失ってしまう。

自分があるとき
他人があり
世界がある。

お父さんにも
お母さんにも
酸っぱい苦勞がふえた。

苦勞は
今は
お前にあげられない。

お前にあげたいものは
香りのよい健康と
かちとるにむずかしく
はぐくむにむずかしい
自分を愛する心だ。

親の祈りを伝えたい

序列主義教育への反逆
無着成恭

はじめにわたしは、現在日

本の学校教育は競争を原理と
する点数序列主義に終始して
いる、と思つていて、ことを
いつておく。いわば点数にな
らないもの—つまり、お金に
ならないもの—もうからない
ものには見向きもしないとい
う傾向が教育をおおつてい
る。ゆるぎない官僚体制を
もつた近代国家は、当然のこ
とながら成績主義—ある角度
からの画一的な、直線的で一
元的な、いわば一次元の世界
を人間に強要すること—にお
ちいらざるをえない運命を
もつている。

そのこのなかにどつぶり
とのめりこんでしまえば、人
間の論理はふつとんで、国家
の論理が先行することにな
る。

その結果として、中学校は
どここの高校—どれだけ卒業生
を送りこんだか、高等学校は
どここの大学—どれだけ送りこ
んだかというふうなことで、
その学校が評価されることにな
る。親も親で、自分の子ど
もの将来の生活の安定のこと

を考えると、テストの点数や
成績や、序列にこだわらざる
をえないという状況になつて
いる。

しかし、そのことが、どれほ
ど子どもを歪めてしまつてい
るか。日本の子どもが歪んで
きているというのを認める
かどうかは議論のわかれると
ころだが、わたしは、子どもた
ちの自殺や非行、殺人、家庭内
暴力、学校内暴
力、差別による教
室内の分裂、その
ほかもろもろの
現象について聞
くにつけ、見るに
つけ歪んでい
ると判断せざるを
えない。それは、結果的には日
本民族のバイタリティーの衰
弱ともつながっているのでは
ないか。

こういうとき、人間という
のは一元的に割り切れるもの
でもなければ、損をすること
なら絶対にしないという生き
ものでもない。損をすること
がわかつていたつて、そのな
かにとびこんでいつて、しか
も、生きがいを感じることに
ある、というような複雑な存
在なんだというふうなことを



いつたい、どこで教えるの
か。 いわば、人間というの
は、自分自身の世界をつくる
ということにもすごく情
熱をもつし、それは、創造的
な想像力というものが保証さ
れたとき、もつとも燃えるも
のだということを、いつ、だれ
が、どのようなかたちで教え
るのか。

そういうことは教えてわか
ることではなくて、教師自身
が創造的にやつてみせるなか
でわかることなのだろう。そ
ういう教育がいまの日本には
なくなつていっているのではない
か。

わたしは、そ
う思つている。
わたしの
「詩の授業」
は、子どもが
本来もつてい
るはずの、人
間の条件とし
ての創造の芽をわざわざつみ
とつて、画一的な偏差値人間
をつくりつつある教育体制に
対する反逆的な実践である。

このような実践は、美術の教
師は美術の授業で、技術の教
師は技術の授業で、音楽の教
師は音楽の授業のなかで工夫
し、それぞれの得手を生かし
て実践されることになるだろ
う。

わたしは詩を教え、詩を書
かせることで、子どものここ
ろからだが、人間であるこ
とを自覚するようにしむけた
い。それをやるために、わた
しは中学時代の子どもたちに
「詩」をあたえたいと思つてい
るのである。

人間とは何か。人間は社会
のなかでどう生きていけばよ
いのか。そうした問いかけに
対して、「奈々子に」という詩
は、「自分を愛する心」をもち
なさいと語りかけている詩で
ある。

父親が、自分の人生体験か
らでてきたたしかな思想で、
娘のしあわせを願うというの
はどういうことなのかを感情
をこめて語りかけている。
自分自身を愛するというこ
とは、自分自身を愛せよと
いうことで、ひじょうにむず
かしいことなのだ。程度の低
いことは何も期待していない
が、程度の高いことを要求し
ている—いや、願つている—
祈つているといつたらいい
か。そういう詩である。

利己主義の方向での「自分
を愛する心」は自分を愛する
ことではなくて、自分を殺す
ことであり、自分を生かす方
向での「自分を愛する心」と
は、どういふものなのか。
平明なことばで描かれなが
ら、人間というものの原点に
立つての親の祈りというもの
がわかるかどうか。それ
をわからせたいというのがわ
たしの願いであった。

「奈々子に」という詩を学んで
………高部智美………八年

私は、この「奈々子に」とい
う詩がとても気に入りました。

(略) 私のお父さんやお母さ
んは、私や妹やお姉さんを、一
人一人のことを考え、祈るよう
な気持ちで見守つていてくれ
ているのだと思つたとき、とて
も、うれしくなります。こんな
に、いろんなことをよく考えて
くれていのに、私はそれわか
らずに、反抗してたりした
のが、とても、いやになりました。
だから、今度からは、そう
いうふうにはしないようにして
いきたいなあ、なんていうこと
を考えました。

私は、この詩でいちばん気に
入つているところがあります。
それは、この詩の最後のほうに
あたる部分の《自分があるとき
／他人があり／世界がある》と
いうところなのです。

私は、はじめ「わがままだ」と
かきました。わがままに生きて
いることは自分を見失うこと
です。自分の責任でやらなければ
ならないことでも、おかあさん
のせいにするからです。それ
は、自分自身を駄目にするこ
とだと思ひました。わがままと
は、弱い自分をかくすことで
す。弱い自分をきたえようとし
ないことです。一見、自分を愛
しているようにみえて、じつさ
いは自分一人では何もできない
人間になつてしまふのです。

峠

真壁仁

峠は決定をしいるところだ。峠には訣別のためのあかるい憂愁がながれている。峠路をのぼりつめたものはのしかかってくる天碧に身をさらしやがてそれを背にする。

風景はそこで綴じあっているがひとつをうしなうことなしに別個の風景にはいつてゆけない。大きな喪失にたえてのみあたらしい世界がひらける。峠にたつとき

すぎ来しみちはなつかしくひらけるみちはたのしい。みちはこたえない。みちはかぎりなくさそうばかりだ。峠のうえの空はあこがれのようにあまい。たとえ行手がきまつていてもひとはそこで

ひとつの世界にわかればならぬ。そのおもいをうずめるためたびびとはゆつくり小便をしたり摘みくさをしたりたばこをくゆらしたりして見えるかぎりの風景を眼におさめる。

「峠」の詩を学んで：

川田典子……九年

は、その世界に別れて、高校という新しい世界がひらけてく。

きつこの詩は私にとって忘れられない宝物のひとつになる。道はこたえないような気がする。とても紙のうのだから。そのかわり、道はかえではいいあわせない感動。ぎりなくさそうのだ。人にきくこの詩はいまの私たちにとっても、自分眼で、自分の手あつている。中学校生活という、でたしかになにかをつかむこと峠をのぼりつめれば、こんどができるのだから。

けれど、ひとつの世界に別れるということは、とてもさみしいことだ。心に大きな穴がボカリとあくように。だからこそ、人はその心の穴を少しでも早くうめようと、新しい世界へ向かって歩きだすのではないだろうか。心の穴があきつばなしだったり、つまりつばなしでは、峠にのぼることはできないだろう。

峠があり、別れがあり、新しい世界がある。私たちは、これから何十回も、この感動をあげわうことになるだろう。そして、そのとき、きつと、私はこの詩を思いだすだろう。そんなとき、別れをつげた世界がひとつずつ「思い出」というかたちで私のまえにあらわれるであろう。

「峠」を勉強して…… 本間秀美……九年 《峠は決定をしいるところだ。》 この一行のなかには、どんなにたいせつなことがふくまれているだろう。

私たちにとって、どんなほめことばより、お世辞より、すばらしいことばがそこにあるのだ。私は、一生、この詩を、このことばを忘れることはできない。

《ひとつをうしなうことなしに》 別個の風景にはいつてゆけない。これが私たちへの答えだ。私たちは、いままでのことを、胸の奥に思い出と教えだけをのこしてすてなければいけない。(略) そして、

すぐ目のまえにある、名も知らぬ山へとりくむ準備をしなければならぬのだ。どんなにこの気持ちからはなれたくなくとも、かならずその気持ちと別れなければならぬ。

《ひとつをうしなうことなしに》 別個の風景にはいつてゆけない。これが私たちへの答えだ。私たちは、いままでのことを、胸の奥に思い出と教えだけをのこしてすてなければいけない。(略) そして、

《ひとつをうしなうことなしに》 別個の風景にはいつてゆけない。これが私たちへの答えだ。私たちは、いままでのことを、胸の奥に思い出と教えだけをのこしてすてなければいけない。(略) そして、

茸の地方

小野十三郎

波の音がする。 遠方に 末枯れはじめた大葦原の上に 高圧線の孤が大きくたるんでいる。 地平には 重油タンク。 寒い透きとおる晩秋の陽の中を ユーファウシヤのようなすすみ蜻蛉が風に流され 硫安や 曹達や 電気や 鋼鉄の原で ノジギクの一むらがちぢれあがり 絶滅する。

人間の根を養つ

教えるのではなく、ふれさせたい 一読、二読、三読、四読、五読 を味わうことができないので、この詩が、わたしの子どもたちにわからぬはずがない。このことが目的ではない。したがって、詩は、自分自身のセンチメンタルリズムを拒否し、事実と対峙している。荒涼とした自然の風景を、人間がつくりだした工業文明の無機質な世界と対比させながら描きだしただけなのだ。あくまでも「物」で語っている詩である。

《峠は決定をしいるところだ。》 そのとおりなのだ。それしかないのだ。この詩は、私のこれからの人生の教訓として一生ついてまわるだろう。それだけすばらしいものなのだ。だから、私は忘れることができな

《ひとつをうしなうことなしに》 別個の風景にはいつてゆけない。これが私たちへの答えだ。私たちは、いままでのことを、胸の奥に思い出と教えだけをのこしてすてなければいけない。(略) そして、

《ひとつをうしなうことなしに》 別個の風景にはいつてゆけない。これが私たちへの答えだ。私たちは、いままでのことを、胸の奥に思い出と教えだけをのこしてすてなければいけない。(略) そして、

どもたちに詩を紹介することだけだ。そして、わたしが子どもたちに願っていることは、わたしが提示した詩をじっくりと味わってもらいたいということだけである。静かに座ること、よく耳を傾けておはなしをきくこと、そして、味わうこと。人生とは味わうものであり、かみしめるものだということがわかってほしい。それはまるで、母親の胸に抱かれて、おっぱいのみながら、子守唄をうたってもらっているような体験ーそんな体験をわたしはねらっている。それは、あまりにも根源的すぎるという批難があつてもいい。

いまの子どもの神経は、日常生活のなかのあらゆる刺激の洪水と、物質的な価値観による序列主義と、競争原理によるテスト体制のなかで、感受性が傷つき、たたきのめされた状況のなかにある。いらいらして、静かに座ることも、きちんとおはなしをきくこともできなくなっている。神経が荒れて、おとながしみじみと語りかけても、それをしつとりと受けとめることができなくなっている。

そういう状況のなかで、わたしがやっていることは、なんと無力なことかと思う。でも、これこそ人間の「根を養う」ことであり、人間を育てる「土壌を肥やす」ことであるという考えでやっている。

《ひとつをうしなうことなしに》 別個の風景にはいつてゆけない。これが私たちへの答えだ。私たちは、いままでのことを、胸の奥に思い出と教えだけをのこしてすてなければいけない。(略) そして、

《ひとつをうしなうことなしに》 別個の風景にはいつてゆけない。これが私たちへの答えだ。私たちは、いままでのことを、胸の奥に思い出と教えだけをのこしてすてなければいけない。(略) そして、

《ひとつをうしなうことなしに》 別個の風景にはいつてゆけない。これが私たちへの答えだ。私たちは、いままでのことを、胸の奥に思い出と教えだけをのこしてすてなければいけない。(略) そして、

《ひとつをうしなうことなしに》 別個の風景にはいつてゆけない。これが私たちへの答えだ。私たちは、いままでのことを、胸の奥に思い出と教えだけをのこしてすてなければいけない。(略) そして、

《ひとつをうしなうことなしに》 別個の風景にはいつてゆけない。これが私たちへの答えだ。私たちは、いままでのことを、胸の奥に思い出と教えだけをのこしてすてなければいけない。(略) そして、

「葦の地方」を読んで……
築田めぐみ……九年

先生が、「風景を頭にうかべろ」といって、まず、読んでくれた。

自分が一人で、黙読したとき、何をいつてるのかわかんないことでも、先生が朗読してくると、風景が頭にうかんでくるから、とても不思議だ。活字を絵におきかえるのって、とてもむずかしい。この詩の場合もそうだった。先生が、ゆっくりと、読んでくれた。

《遠方に》
波の音がする。
末枯れはじめた大草原の上に
高圧線の弧が大きくたるんで

いる。《こまできたとき、私は、なんとなく悲しく、さみしい詩だなあと思った。《末枯れはじめた大草原の上に／高圧線の弧が大きくたるんでいる》風景が、とてもさみしいイメージをつくったのだ。そして、そのさみしさは悲しい気もちにふくらんでいったのだ。》

そして《地平には／重油タンク》というところから、ああ、人間は、人間が作った科学文明によって滅ぼされていくというこを詩にしているんだなあという感じがピンときた。そのことを作者は悲しみ、そうあってはならないということを読者にうったえたくて、この詩をつ

くったのだなあと思った。私

が、最初に、この詩から語りかけられたことは、そういうこと

だった。しかし、内容の勉強にはいると、なかなか手こたえがあった。スーッと、なにげなく読んでいたところ、私がたんにさみしい、悲しい気分にはせられたところ、《ユーファウシヤのようなどうすみ蜻蛉が風に流され》というところ、《ノジギクの》むらがちぢれあ

りというところには、重大な意味がくさされていくところ、《ノジギクの》むらがちぢれあ

りというところには、重大な意味がくさされていくところ、《ノジギクの》むらがちぢれあ

りというところには、重大な意味がくさされていくところ、《ノジギクの》むらがちぢれあ

じた。だから、《硫酸や 曹達や 電気や 鋼鉄の原で

ノジギクの一むらがちぢれあ

り絶滅する》というところでは、いろいろ並べてあるけど、これは人間が

くりだした科学文明の品物のこと、そういう生命のないものが、生命のあるノジギクをほろ

ぼしていくということについて

私、人間が幸福になるためにつくりだした科学文明によって、ついに滅ぼされていく、ということ、この「葦の地方」という短い詩のなかでいっていることに、すごく感心した。そうすると、「葦の地方」というのは、人間の住む「地球」と解釈してもまちがいでないかと思った。私が、こまでわかったとき、またまた重大なことがあきらかにされた。それは、この詩は、昭和十四年の元日に、昭和十三年の晩秋を頭に浮かべながらつくられたという事実である。それはもう四十年もまえのことである。公害なんて、まだぜんぜん問題になつていないときのことである。日中戦争がはじまって、日本中全体が戦争（戦争へとむかっている）ことである。太平洋戦争を迎える前夜のことだ。この詩が、そういう状況のなかでつくられたんだとわかったとき、《どうすみ蜻蛉》とは、戦争（戦争へと流されていく日本

人のことであり、《ノジギク》

というのは、戦争はいやだとい

って、戦争反対にたちあ

がった人びととか、戦争のなかで死んでいった人びとのこ

とをシンボルしているという

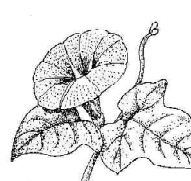
ことがわかってきた。でも、私の感想はまちがってないと思う。無着先生は、「戦争をやるときも、指導者は『東洋永遠の平和のために』とか、『世界平和のために』とかいうスローガンをかけないわけにはいかない。つまり、『平和のためにやる戦争』なんだといわないわけにはいかない」と話してくれたとき、私は、「おんなじだ！」と心のなかでさげんだ。だって、人間の幸福のために科学を発達させるといふことでは、平和のために戦争を！ 幸福のために科学を！

この歌が読者の心に訴えるものが、もしあるとするなら、流木に対して何を話しかけたのかということなのだ。話しかけた内容が読めなければ、この歌はおもしろくもなんともない。ということは、あきらかに、砂山は、生命のない砂であるから、死の床をシンボルするし、流木とは、流転を重ねてきた自分の分身をシンボルする。つまり、自分が自分に語りかけているのであり、いわば自分との対話なのだ。自分自身の来し方、行く末について思うとき、ため息ので

る一瞬を、だれもいないところで、「死の床によこたわっている流木よ、おまえも、たいへんな流転を重ねてきたんだらうなあ」と同感し、「流転を重ねてこまでやってきた自分自身」というものをイメージしなくては、この短歌がでてこない。そのようなイメージ、想像がさきにあつて、それが具象化されるのだらう。

そのころを子どもたちにわからせようとするとき、俳句や短歌を使うのは有効なわけではないか。ひとつの世界をまとめていくとき、俳句や短歌のような型をテコに使うこと、想像力をきたえるのにきわめて有効なのではないか、と考えるようになってきた。つまり、型のなかに徹底的に自己をおしこめてみて、型に血をか

型に血をかよわせる



よわせることができたなら、そこに、そのひとのいのちが表現されてくるのだらう。

型に血をかよわせることができるかどうか。それは、空想力・想像力、創造的な想像力の問題だといつてもいい。そのとき、その型は、その人の形になるのだらう。そしてそれは、社会や他人とはかかわりのないことだ。

いわば、そこに、自分の形（生食が存在しているということ）であつて、善悪とは関係のないことだ。よいことでもないし、わるいことでもないという世界がそこに出現したことになるのではないか。わたしは、そんなふうにかえるようになって、俳句や短歌を授業（補習の時間）でとりあげてみた。

また、「型」という観点からいうならば、小学校の四十五分の授業も、中学校の五十分の授業も型に支えられなければ授業にならない。したがって、すぐれた実践家ほど型をもっている。その型は俳句や短歌の型にも通じている。（無着成恭）



◎啄木の短歌

佐藤有子……七年

《東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたわむる》

この歌の意味は、「東の海に浮かんでいる小さな島の磯の白砂浜で、わたしは泣きながら蟹とあそんでいますよ」というのです。

蟹とあそぶのに、どうして泣かなくちゃいけないの？ということが、この短歌の深い意味をとくかぎでした。蟹とたわむれるのになぜ泣くのか……。あたしだったら、キヤーツ、カニがいるなんて、よるこんでしまるところです。ところが、啄木は泣きます。なぜか。わかりませんでした。

ところが、無着先生は、「東海」というのは、中国大陸からみると太平洋だね、大きいんだね」といいました。そして、わかつたのです。東海、小島、磯、白砂、そして蟹——とだんだん小さくなっていくのです。東海も小島も磯も白砂も、空間名詞です。蟹は小さな名詞です。つまり、巨大な空間、宇宙の中にいるのに、小さな小さなところにとどこもって、毎日毎日のくだらない日常的なことにこだわっている自分が、なんとちっぽけで、みじめなことよーとい

うのが、この歌のほんとうの意味だったのです。

こういうのを意味の二重性とか重層性とかいうのだということを教えてもらってとてもよくわかりました。毎日のくだらない「ごたごたを」蟹という単語でシンボルしているなんてすごいと思いました。

● 中塚詩子……七年

無着先生に、石川啄木の短歌集(角川文庫)を紹介してもらってから、私はすっかり、この歌集のとりこになってしまった。

たったの三十一文字(ミソヒトモジ)で、自分の思想や気持ちをこんなうまく、人に伝えることができるなんて！短歌って、ほんとに短い歌だけど、すごいと思った。また、石川啄木って素晴らしい人だと思った。

私は、啄木の短歌をひとつあげるといわれたら、

《しつとりと
なみだを吸える砂の玉
なみだは重きものにしあるかな》

この歌をとりあげる。スラッシュと読みすぎしてしまえ

ば、なんのこともない歌だ。さらさら乾いている砂をのひらにすくってみても重みは感じられないが、しつとりとなみだにぬれた砂の玉は重いなあ、なみだというの重いものだなあ、ということだけの意味である。別にどうってことのない内容である。なにもなみだでなくたって、水にぬれている砂だって重いよ！という人もいる。乾いた砂は軽いけど、ぬれている砂は重いんだ。そんなことがどうして「詩」になるのか。

それは、乾いている砂とは、生命のない砂のことで、《なみだを吸える砂》とは、生命のもっている砂ということをシンボルしているからだ。しつとりとした感情をもっている生命体としての砂の玉。つまり、人間の生命というものは重いものなんだよなあといっているのだ。このように、この短歌には深い意味がある。ほんとうのこと言って、先生から習ってない短歌を読んだとき、深い意味がよくわからない。でも、読みたい。わからなくとも読みたい。私は短歌が好きになった。(これ、ほんとう！)

俳句の鑑賞(十句から選ぶ)

猪股佳代子……九年

《倒されて案山子(かかし)はじめて天仰(てんおぼ)る》

私、この俳句、好きです。

案山子(かかし)はいつも田んぼぐらしか見ることができません。けれど役目が終わったときにやっどちがう景色が見られるのです。でも、それは現代時代ではなく、人間にたとえれば、定年後か、死ぬときなわけですね。人間の場合、自分が信ずる道でなく、人につけられたわくのなかで生きていく人。そういう人はいつもいつも決められたなかでおなじものしか見ていないのです。人に強制的にやらされて、それに反対もせずだまってやっている。そういう人ってというのは心が自由じゃないんですね。自分の意志

俳句の鑑賞

俳句を教えてください……
橋本想……九年

無着先生から俳句とはどんなものかをおそりました。十句の現代の俳句をおそりました。たが、そのなかでも、

《トンネルをぬけても同じおぼる月》

という句がいちばん好きです。

トンネルというのも、トンネルをぬける特急列車やクルマも人工的な物を意味し、現代の科学文明を代表しています。それと反対に、おぼる月というのは太古さながらの自然の姿を表わしています。人間がいくらがんばって見たところで、結局、大自然の法則を変えることなどできない。いくら科学が発展して、人が死なないうような薬ができたとしても、結局は死ぬ！

科学はなんでもできる、万能だ、かのように見えるが、結局は、はかないものだったのだ、というあきらめというか、気ぬけたというか、行きづまったというか、そういう現代の気持ちを表わしている句だと思えます。人間は目先のことばかり見たらだめになるぞということを教えてくれるところもあります。だから、この句が好きです。

佐伯美歌……九年

《初蝶や早くも風にさらひて》

この俳句の意味は、初蝶を人間にたとえると、義務教育を終えて社会人として職をもつ人、あるいは、高校・大学を卒業し、社会へ出て働くとする人たちである。その人たちは、もう学生時代の甘えは許されない。小学校に入學したばかりの子どもみたいに、「小学校一年生だから……」というふうには見られない。その人たちがどんな失敗をしても、社会人一年生だからということでは、許されないのである。

社会人となった人間は、早くも世間のきびしい風に向かっていかなくてはならない、という意味ではないかと、私は思っています。

この俳句とおなじぐらいい気に入ったのは、

《行く年の起重機の腕たたまれず》

という俳句です。一年の暮れに、みんな一年の仕事を終えて、それぞれの家でくつろいでるとき、起重機は仕事をしたときのままだって、腕を休めることができない。そのあわれさ。かなしさがジンときました。

この起重機は、なんだか科学文明、機械文明のなかの現代人をシンボルしているみたいで、これを読んだとき背すじがゾクゾクッとしました。

目に見えないものを見る

私、いつも空を見つめ、自分の世界を見つめ、自分の信ずる道を進みたいのです。私、そうやって生きていきたいんです。いまは、まだ、それがどういふものなのかわからないけれど、私、そうしていき

ちよつと関係ないかもしれないけれど、《倒されて案山子(かかし)はじめて天仰(てんおぼ)る》をよんだ私の気持ちです。死んでからしか天を仰ぐことのできない案山子(かかし)があまりにもあわれで……。

エピソード

無着先生、さようなら

◎……上候恒……九年

◎………窪寺詠子……九年



夢は現実ではないからバラ色なのです。道は、バラ色の空のむこうまでつづいていきます。

いよいよ卒業だ！ というまぎわに、石垣りんの「不出来な絵」の授業をした。

「絵」という物で象徴されている「自分」というもの、あるいは「生き方」というもの、あるいは「自分の人生」というもの、そういうことを語った。そして最後に、

一週に一回きりの三年間。下手でしたがせいじつばい心をこめてやってきました。わたしの「詩の授業」はこれでおわりです。

石垣りんの「不出来な絵」のようにわたしの「不出来な授業」を真剣に聞いてくれてありがとう。では、さようなら。

そんなふうについて、子どもたちに深ぶかと頭をさげた。わたしは、自分の語りたいことに耳を傾けて聞いてくれた子どもたちがいたということに、心の底から感謝した。

ところで、このあと、一時間だけ、この子どもたちと会う時間をもらったので、『不出来な絵』の感想でもいいし、三年間をおしての、わたしの「不出来な授業」に対する感想でもいいから書いてくれないか」とたのんだ。

無着先生、さようなら

◎………本橋史朗……九年

無着先生から、いろいろな詩を教えてもらった。そのなかでも、壺井繁治の「挨拶」という詩を教えてもらったときのことだった。無着先生は、「挨拶とは、相手の心とびら

をひらくことだ」といった。「挨拶ひとつで、相手は心とびらをひらくこともあるし、

とじることもある。相手の心をとぎすような挨拶は挨拶じゃないんだ。挨拶は、相手に、心をひらかせるためにするものだ」といった。

ばくは、どういうわけか、そのときの無着先生のことばと顔をありありとおぼえている。

◎………中桐敏雄……九年

三年間、いろいろな詩を習ったが、俺にとつていちばんためになったのは、その詩の授業のなかで、もつとも授業らしいところではなくて、脱線した部分だ。横道に話が

ようではなれていないのだと思つた。脱線してくれたからわかつた詩もあり、それで俺の人生観が変わってきたこともある。

「無着の授業はいいかげんだ」という人とはなすときは、俺も「まあ、そういうええ、いいかげんだな」といつたりする。そういうふうにあいづちをうつ俺も、

まあ、だいたいいいかげんなわけだけど、無着先生の話は、よく聞いていると、

脱線した部分にこそ、先生の本質が出ていたと思う。そして、俺はそこでいろいろ学んだのだ。

だから、話が横道にそれると、「いいかげんだ」と思いつつ、ひそかに、うれしかった。俺は、先生の脱線のなから、たくさん学んだ。

PS 先生、授業に関係ないと思われる話はやめたほうがよいもだけれど、先生の脱線はおもしろくてためになるから、俺たちの後輩の授業のときにも、脱線してあげてください。そのときには、ちゃんと時計見ながらやつたほうがいいと思うよ。



先生に教えてもらった詩のなかでいちばん強く印象に残っているのは、「峠」なんだけれど、ぼくとしては、やっぱり、石垣りんの「表札」です。

この詩は、ぼくが詩の暗誦をしてから三つめのものですが、みんなのまえにでて暗誦の発表をしたりした期間がいちばん長いのです。だから、ぼくがまえにでると、みんなは、

「あ、表札だなんて、すぐわかるようになってしまつていきました。先輩がぼくを呼ぶとき、

「おい、表札！」とか、「石垣りんなんてよく言われるようにさへなりました。」

《自分の住むところには自分で表札を出すにきがる。》
《精神の在り場所もハタから表札をかけられてはならない
石垣りん
それでよい。》

第一連と第八連を読んだだけでも、ぼくは身のひきしまる思いがするんです。無着先生がよくいう、「自由な精神」とか、「自分自身の決心」とかというの、

ぼくは、この「表札」で、「あつ、そうかあ」とわかつたような気がするんです。(略)

まず、ずばり、私は無着先生が大好きです。なぜだかはつきりしていないけれど、先生の変わったみりよくにひかれるのです。(略)

私は、無着先生の授業でほんとうにたくさん大切なことを、すばらしいものを得ました。

勉強はできなくても(もちろんできたほうがいいが…)、ほんとうに人間が考えなくてはならないことをおそわりました。

授業のなかで、「ああ、これが人間なんだ。人間とはこういうものなんだ」となつてくしたことが、なんべんもあります。

無着先生の授業で、山登りにてきなあつて思うことがあります。詩を書き写しているときが、山のふもとをはいずりまわっているような感じ。なんだかよくわかんないけれど、あるいてるって感じが。それから声をだして朗読して、むずかしい単語や語句を調べていくと、だんだんだんだん高まつてきて、

パアツとひらけてくる。そんな感じなんです。

だから、授業がすすむにつれて、教室全体がだんだん、だんだん緊張してきます。そして、いっぺんに頂上へおしあげられてしまふ。そんな感じなんです。だから、無着先生の授業は「緊張してつかれるから嫌い」っていう人もいますが、私

は嫌いなじゃありません。

つかれることはつかれるけど、終わったあと、ああ、授業したなあーっていう感じ。

それに、授業のなかであーそいうなか、なるほど、と思うことがたくさんあります。それを自分のなかに得て、家で自慢するように説明します。

とにかく、うまく言えないけれど、授業でわかることもおもしろいし、おそわることが自分のからだのなかにしみこんで消化されていくっていうのかな？

そういうのがうれしいのです。あーそうか、そうなのか、と自分でなつとくできる、そんなのがたのしくて、たのしくて。だから、どんどん授業にひきこまれてしまいますね。なんかうまく言えないから、すごくやさしいのだけれど、無着先生にはわかつてほしいです。(略)

無着先生の最後の詩は「不出来な絵」でした。この詩には一人の人間の人生というものが描かれていきます。絵のなかに描かれている一本の道。それが、私があゆんできた道であり、あゆんで行く道です。行く手に見えるうす紫とバラ色の空、これは、少女時代に見たゆめ。

それは間違いない。もつと、まっすぐに、堂々と、素直にならなければいけないということをこの詩から学びました。素直な心にならなければ真実が見えるようにならないということや、自分の人生を信じることを学びました。

無着先生、この三年間、ほんとうにありがとうございました。

「山のあなたの空遠く」です。でも、その夢を実現するためにあゆまなければならない。あゆむことは現実です。現実にはしつばいがたくさんあります。しつばいの連続。それがこの絵のなかの一本の道です。

しつばいの連続としての「道」と、その両側にひらけた風景、それを描いた絵。それは「不出来な絵」です。けれども、それは私がそのときそのとき、自分で考え、自分の責任で判断し、これでいいんだときめてきたこと。精いつばい、一生懸命生きてきたすじみち。人生。

「そういう人生でいいのだ。それは、不出来な人生かもしれないが、それはそれで美しいのです。そういういても、その絵がほしい」という人があらわれると、「私、だめよ」とかなんとかがいつて、すねたり、いじけたりします。

それは間違いない。もつと、まっすぐに、堂々と、素直にならなければいけないということをこの詩から学びました。素直な心にならなければ真実が見えるようにならないということや、自分の人生を信じることを学びました。

無着先生、この三年間、ほんとうにありがとうございました。

無着先生、この三年間、ほんとうにありがとうございました。

無着先生、この三年間、ほんとうにありがとうございました。

無着先生、この三年間、ほんとうにありがとうございました。

今年三月、中央教育審議会(中教審)が「小学校英語」必修化を提言しました。早ければ次の学習指導要領改訂に盛り込まれて、二〇一〇年前後には、全国の公立小学校の五、六年生で週一回の授業が始まるようになっています。学校週五日制による授業時間の大幅削減、生きる力を育てる「ゆとり教育」の中で、「学力の低下」が指摘され、文部科学省は、見直しに着手しました。小学校での英語導入と合わせ考えてみることにします。

文学界七月号で、特集「国語再建」、『日本人の誇り』は国語教育から」といタイトルで、藤原正彦と斎藤孝が対談しています。

中教審中央教育審議会は「小学五年生から英語を必須に」との提言をしたが、その前にまず国語教育を抜本的に見直す必要があるのではないか。生きていくうえで欠かせない論理的思考、倫理、情緒、美的感受性はすべて国語教育を通じて育まれる。

現状は、いくら早くから英語を教えてもほとんど効果があがっていない。週に一、二時間やっても何の影響もない。三、四時間程度でもできるようにならない。しかもその分、肝心な国語の時間が削られてしまう。英語もできず、日本語も中途半端な人間が育ってしまう。

とにかく今の英語教育への狂騒には、大きな誤解とコンプレックスがある。英語を広めていくことが、ある意味では英米の戦略。英語が世界の共通語に

なれば、英米が圧倒的に有利になる。

インターネットを英語で統一することは断固阻止すべきだが、インターネットの英語程度は、もうじき自動翻訳ができるようになる。英語に対して妙に不安を持つ必要はない。その国独自の文化を支えるのは、その国の言語。

言語はコミュニケーションの道具というだけでなく、思考自体、あるいは情緒もすべて言語を土台にしています。日本語を捨てて英語を公用語にしたり、半分英語をいれたりすると、日本人の思考、情緒、文化自身が変質する。

語学を身につけるためには、血のにじむような努力をしなければならぬ。小学校から教えるれば何とかなるといっては甘い考え。

大事なことは、英語を話す技術ではなく、伝えるべき内容を持つているかどうか。英語は片言で全然かまわない。話す手段よりも、話すべき内容

を身につける。そのためにはとにかく国語を通じた読書以外にありません。いくら語学の勉強をしても、人間の身は豊かになりません。

中教審は、英語を学ぶ理由として「異文化を理解し、我が国の文化を発信し、異文化と対話する力を育てるとの視点を持つことが重要である」

異文化を理解するのは翻訳を通じるのが早道。翻訳家になる人、外交官になりたい人や商社マンになりたい人は、中学校で週三時間程度の英語では到底足りない。九時間ぐらい勉強する。全国民を対象に、小学校から英語を勉強する必要がない。その分、読書をする。

限られた授業時間数。一週間の授業が一〇〇時間あ

れば、英語もパソコンも教えることに反対しない。しかし、小学校における授業時間数は、週に実質二十数時間しかない。そこで何を優先させるかといえば、国語の勉強を通して日本人としての文化や情緒を身につけること以外にない。初等教育において、英語やパソコンの入る余地はまったくない。

いま、倫理観の欠如が言われるが、倫理観を倫理観そのものとして教えるのは難しい。そうではなく、哲学的なもの、あるいは文学、歴史、伝記といったさまざまな本を読むことで、人類が成し遂げてきたことを学び、感性も磨かれ、倫理観が形成されていく。

人間の本能が利害得失にあるのは仕方ないにせよ、人間としてのスキルはその本能からどれだけ離れられるかで決まる。そのためには読書によって美しい情緒を養うしかない。

教育にはある程度、強制力が必要で、たとえば漢字にしても強制的にやらなければならないが覚えられませぬ。漢字と読書と計算、この三つは人間とけだものを分ける境界である。教育や娯楽は、けだものを人間にすることですから、この三つは押し付けてでも絶対に教えないければなりません。

子どもの頃、伝記を読んで、憧れを抱くことが、実は生きていく上で非常に大切なことなんです。人間の情緒の中でも、野心は大事なものの一つです。そのためにも、伝記を読んだりして夢をかき立てられることが、子どもたちにとって

実学優先という謳い文句が言葉に役立つかを教えるべきだ、とあるいは大学は産学協同でお金儲けにつながる研究をすべきだ、といった風潮があるが、教育の役割はけっしてそうしたものではありません。論理的思考を培ったり、ものを考える楽しさ、解けたときの喜びを知ったりしないと、それこそ

生きる力はつかない。実学優先は国を滅ぼすことになる。何の役に立たなくても重要なものが非常に多い。

キレやすい子どもが多くなってきたというが、脳の中で、自分の感情を抑えたり、他人とコミュニケーションをとったりする能力をつかさどる前頭野野という部分は、音読や計算などの地味な作業をしている時に活性化される。個性とか獨創性に関する幻想が、こころの教育の迷走をもたらしたと思います。個性や獨創性には、ある型を経てはじめて開花する。

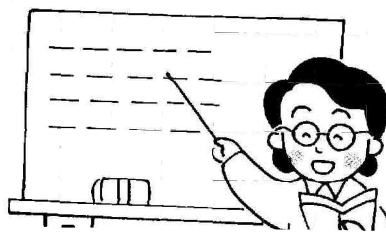
国語力を鍛えるには、読書を積み重ねるしかない。本を沢山読むには、我慢力が必要。がまん力をつけるために読書が必要。

数学の問題を解くにも我慢力が必要であり、読解力がないと問題の意味が分からない。論理的思考のために決定的に必要なのは国語力。

実学優先という謳い文句が言葉に役立つかを教えるべきだ、とあるいは大学は産学協同でお金儲けにつながる研究をすべきだ、と

いった風潮があるが、教育の役割はけっしてそうしたものではありません。論理的思考を培ったり、ものを考える楽しさ、解けたときの喜びを知ったりしないと、それこそ

生きる力はつかない。実学優先は国を滅ぼすことになる。何の役に立たなくても重要なものが非常に多い。



小学校の英語教育は必要か

「英語が使える日本人の育成のための戦略」としては、中学英語教育の改革こそが、もっとも有効な「戦略」であり、最優先すべき課題だと主張しています。

ゆとり教育が、 がんきょう 学力低下の元凶か

▼二〇〇四年末、先進国で構成されるOECD(経済協力開発機構)の国際学力調査結果(読解力が前回の八位から十三位に、数学的应用力は一位か六位に落ちた)を契機として、日本の子どもたちの学力低下が大きな問題となると、学力低下の元凶が「ゆとり教育」、「総合学習」にあるという批判が強まり、中山文部科学相は先の中教審総会で、ゆとり教育の骨格を形成している学習指導要領の見直しを検討するよう要請しました。

しかし、「学力低下」といっても、実際の程度の異なるものであるかは、いろいろな受け取り方がある。一概ではなく、その意味するところは必ずしも明確ではありません。目先の得点に振りまわされず、その意味するところを明確化すること、およびその問題に対する抜本的改善策を探ることが重要です。

▼ゆとり教育と「総合的な学習」

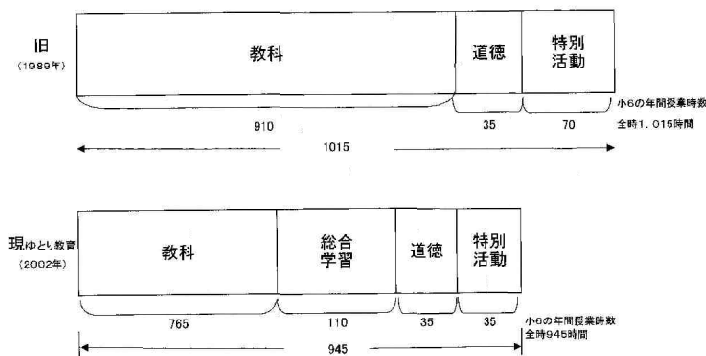
平十四年四月からスタートした完全学校週五日制に合わせて、学習指導要領は学習内容が三割程度削減されました。(授業日数で年間約四〇日、授業時間にして、最も多かったことと比べ、小学校六年間で四五四時間、中学校三年間で五九五時間減りました。)

これに合わせて、これまでの知識のつめ込み教育から体験活

動をとおして知識を習得する方法を学ぶ教育への転換、生きる力を育てる「ゆとり教育」が導入されました。

その「ゆとり教育」の一環として、それまでの小・中学校の教育課程である「教科」「道徳」「特別活動」の三領域(高校は道徳を除いた二領域)に新たに「総合的な学習の時間」が導入され四領域となりました。「教科」とは国語とか音楽など十教科であり、特別活動とは(生徒会、学級活動、ホームルームなど)です。「総合学習」とは、したがって、

学習指導要領における領域



教科ではなく、①地域や学校、子どもたちの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間、②国際理解、情報、環境、福祉・健康など従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行える時間として新しく設けられたものです。

この時間では、子どもたちが各教科等の学習で得た個々の知識を結び付け、総合的に働かせることができるようにすることを目指しています。時間数は、小学校では三年以

上から週当たり三時間程度、中学校では週当たり二〜四時間程度となっています。

公立小・中学校の一週間の標準時間数は、小一(二十三時間)、高学年(二十七時間)、中学校(二十八時間)となっております。時間割は、道徳と特別活動が各一時間、総合学習が三時間程度、残りが教科となります。

▼小学校の崩壊?

「小学校では教師は児童の個性重視ということで、しつけや強制が失われ、保護者も含めて、万事自由に楽しくといった雰囲気です。その結果、読み、書き、計算の基礎学力の低下を招いています。それが中学校になると高校受験があるから変わります。教科のレベルについて行けない生徒の保護者は、急に声高になり、補習授業を要望し、塾通いがはじまります。また、不登校の原因の一つにもなっています。」

小学校の基礎学力の低下が、中学校、さらに高等学校とマイナスに響いて行きます。私たちは小学校の崩壊と呼んでいます。総合学習について言えば、まず、小学校も中学校も圧倒的に教科の授業時間が減りました。補習や二学期制などでカバーするのは本筋ではありません。総合的な学習で扱うテーマは昔から、それぞれの教科の中で、体験学習など適宜こなしてきました。

た。生きる力の源泉は基礎学力です。総合的な学習が必要になると思うのは、高等学校に入ってからです。総合学習の時間を減らし、中学校では教科の選択制を見直して、学習の基本となる国語や算数の授業時間を前に戻せば足りると思います。

義務教育の小中学校では、『生きる力』の基礎となる学力をしっかり身につけさせることが大切です。という意見もあります。

学校によっては、夏休みを短縮したり、三学期制より、始業式や終業式、定期試験の日数を減らすことができるから二学期制を導入するなど工夫しています。

これらは、学校週五日制や新学習指導要領で七十時間も激減した授業時間を少しでもカバーし、学力低下不安に対処しようとする苦肉の策で、取り組みが全国に広がっています。

「ゆとり教育」といながら、逆に短い授業時間が「ゆとり」をなくしている気配です。

しかし、学力低下は、それよりも、学校以外での勉強時間が最も問題だという声もあります。

先進国で構成されるOECD(経済協力開発機構)の二〇〇四年の調査でも、高校生の学校以外での勉強時間は、日本は週六・五時間に対して、韓国は十二・七時間と、倍です。

また、日本青少年研究所の「高校生への未来意識に関する調査」

(二〇〇二年)によると、日本の高校生の平日の家の勉強時間が一日当たり五十分に対して、中国は百四十七分と約三倍になります。

ちなみに一九八〇年の調査では日本の勉強時間は百分ですから、この二十年で半減したので、大学生の勉強時間も、日本は中国や韓国に圧倒的な差をつけています。

▼百年の大計に立って

受験地獄で、人間関係が希薄になり、学力の格差が進むことで「校内・家庭内暴力」「不登校」「いじめ」が増加。

大学の門戸を広げてみると学力の低下した大学生が増え、高度に専門化された学問についていけず、果ては「ニート」に。体験不足が深刻だから「総合的な学習」を創設したものの、取り組みの熱意には学校格差が。教科の内容と時間を削減したから基礎学力が低下と批判を浴び、「学力向上」策を。

十年英語を学習しても日常生活話もできないといわれ、小学校から「英語学習」を。基本的な生活習慣が乱れ学力にも影響が出ているから「食育」を。

誤りを正すことのために誤りはないが、泥縄式ではなく一貫性のある、長期的大局的総合的な視点での教育政策が求められます。

波む

—Y・Y—

茨木のり子

新緑の気ままにとく



友人のイギリス人は、日本の古い文化を愛し、その研究に生涯を賭けようと、妻子とともに来日した。彼は許されるならば、日本に永住する覚悟だったのだ。けれどわずか三カ月で、妻子をイギリスに帰してしまっただけ。その理由を、彼は憤りをあらわにさせて私に語った。

無着先生のもと、答辞を書いた佐藤藤三郎、詩の感想を書いた子供たち、自分の人生を決めた十冊の文庫本を読んだ宮元輝、いずれも中学三年、十五のとき。

▼命の器(宮本輝)

う。なんと見事に、かたよつた読書からまぬがれ得たことだろう。そしてなんと見事に、最も純粋で吸力力の強い年代に、それらとめぐり合ったことであろう。そのことを不思議と言わずして何と言すべきか。(略)

「日本のテレビは、いったい何だ。まるで動く赤新聞ではないか。卑しい男女のスキャンダルを、さも大事件のように調査して、昼日中から放送している。夕刻は漫画だらけで、おまけに、これが子供たちのものと首をかしげるような、きわどい、残酷なシーンが、次から次へと映し出される。そして夜も、セックス、セックス、セックス。それは夜中まで延々と続く。これで人間が馬鹿にならなかつたら不思議じゃないか。」

我が家にも、中三の娘が二人いるのだが、彼女たちを見てみると、思惑通り、人間骨抜き計画は、いま着々と実を結びつつあると思う。「人生七掛け説」を言ったのは、長洲神奈川県知事故人だったが、二ユースキヤスターの筑紫哲也は、後に学生を教えるようになって、「素直で可愛い子たちなのだが、何とも幼い。二〇歳だと思ふと苛立つこともあるが、一四歳だと思えば腹も立たない。」と納得する。

大人になるというのはすれっからしになることだと思ひ込んでいた少女の頃立居振舞の美しい発音の正確な素敵な女のと会いましてそのひとは私の背のびを見すかしたようになげない話に言いました

▼「子どもたち、詩を読みなさい。とびきり上等のいい詩を読みなさい。いい詩というのは、詩人が自分の思いをどこまでも深く掘り上げて普遍(ほんとうのこと)にまで届いた詩のことです。詩人の仕事は、生きる喜びをうたうことです。いい詩はみな、生きる喜びにあふれています。いい詩を読むと、ふむふむそわか、となかかわかります。やさしい気持ちになります。疑問に思っていたことがばつと解けることもあります。」(略)

生まれてから死ぬまでの一生の間、自分はなぜ生まれてきたのか、何の用事でこの地球上にいるのか、ほんとうの生き方というものがいいのか、悩みはつきません。その折り折りにこの詩集は役に立ちます。気に入った詩にであつたらなんども読み返し、時には声にだして読んでごらんください。読み返すたびに、階段をおりてゆくように、真実の底にたどりつくでしょう。生きていてよかつた、と思う時が、かならず、きます。

初々しさが大切なのに人に対しても世の中に対しても人を人とも思わなくなつたとき墮落が始まるのね 墜ちてゆくのを隠そうとしても 隠せなかつた人を何人も見ました

梅田の商店街の道端で、男が莫慮を敷いて、手垢のついた文庫本を一〇冊ずつ一組に紐で束ねて売っていた。値段を訊くとどれも一組五十円。男はしぶつたが、ほどこいた紐は全部自分でくくりなおすからとねばって、自分の好きな本を十冊選んだ。母は財布から十円玉を五つ出した。

「なぜ、その十冊を、男の邪魔臭さをあからさまにした視線に耐えながら選び出したのか、それも遠い昔のことと覚えてはいいない。だが、露店の莫慮の上から選びだし、私が中学二年か三年の終りにかけて、それら十冊の文庫本を何冊も何冊も読み返したことは、何かも不思議な天恵であると同時に宿命でもあつたのだと思えてならないのである。私はなんと見事に名作ばかり選びだしたことであ

確かにその言葉はいま現実化しつつあるような気がする。若者の多くは、そのとき楽しければいいもの、つかのま笑い転げるものしか求めなくな

▼「目的はひとつ。次代になる子供たちを決して精神的に高度な大人に成長させないことである。自分たちの意のままに動かすことが出来なくなってしまうからだ。まずは、贅沢と享楽を与える。じつに低級このうえない文化を作り出し、あらゆる媒体を利用して、その中にどっぷりとひたさせる。」(人間骨抜き計画)

私はどきんとしそして深く悟りました

大人になつてもどきまぎしたつていいんだな

「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰、軽んずべからず。」

「もつたいない」……で、当選した知事もいたが、人間には持ち時間がある。時間の浪費こそ、もつたいない。

夏休み教育特集号お届けします。ご感想お待ちしております。暑中お見舞い申し上げます。



「親の意見と茄子の花は千に一つ」の徒もないなどという言葉も知ら

「親の意見と茄子の花は千に一つ」の徒もないなどという言葉も知ら

夏休み教育特集号お届けします。ご感想お待ちしております。暑中お見舞い申し上げます。

大人になつてもどきまぎしたつていいんだな

生まれてから死ぬまでの一生の間、自分はなぜ生まれてきたのか、何の用事でこの地球上にいるのか、ほんとうの生き方というものがいいのか、悩みはつきません。その折り折りにこの詩集は役に立ちます。気に入った詩にであつたらなんども読み返し、時には声にだして読んでごらんください。読み返すたびに、階段をおりてゆくように、真実の底にたどりつくでしょう。生きていてよかつた、と思う時が、かならず、きます。

この詩集を、ほんとうの子どもの心を持った大人たちに捧げます。」(ポケット詩集より)

▼「目的はひとつ。次代になる子供たちを決して精神的に高度な大人に成長させないことである。自分たちの意のままに動かすことが出来なくなってしまうからだ。まずは、贅沢と享楽を与える。じつに低級このうえない文化を作り出し、あらゆる媒体を利用して、その中にどっぷりとひたさせる。」(人間骨抜き計画)

夏休み教育特集号お届けします。ご感想お待ちしております。暑中お見舞い申し上げます。

* Y・Y (女優、山本安英)